

みなと

今・むかし新聞

第4号

平成18年 3月

近所は、にぎやかなた
昔を振いかえるイベント

「しんばし界限をふりかえる

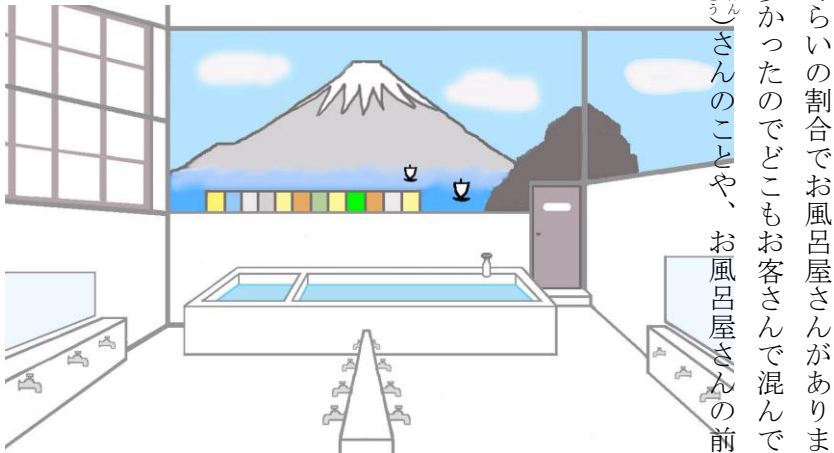
〜お風呂屋・物売り・婚礼〜

十一月四日の朝七時頃テレビから「二十年十一月のあの時」という番組が流れておりました。三遊亭円歌（さんゆうて いえんか）さんは当時十六歳で新大久保駅に勤めておりました。日本国中、物が不足し、買出し、闇市（いっし）の時代です。ある日円歌さんは駅長から炭を買出しに行くように云われました。列車は混んで大変な思いで炭を買って帰ると、自宅に運ぶよう言われたそうです。

港区で育った私たちは、今の景色の向こうにどんな新橋があったか、第五回フェスティバルの日当日「しんばし界限（かい）を振り返る」というイベントで「お風呂（ふ）屋」「物売り」「婚礼（れい）」をテーマに、昔のことを思い出す会が開催されました。開会三十分前の午後

二時頃から皆さんが集まりだして、古くから新橋に住んでおられる方を中心に昔懐（な）かしい話を交わしておりました。

「銭湯」の話は新橋界限のお風呂屋さんの場所を細かく示した地図の説明から始まりました。来場者の中には不明だったお風呂屋さんの名前を教えて下さった方がおられました。大体昔



は二町会に一軒くらいの割合でお風呂屋さんがありましたが、住民が多かったのでもちろんお客さんで混んでいました。番頭（ばんとう）さんのことや、お風呂屋さんの前の歩道にはお寿司屋や焼き鳥屋などの屋台（やたい）が出ていて楽しいひとときを過ごしたという話、子どもを大勢連れて行ってもみんなが手助けしてくれたとか、子どものしつけも自然にできたなど、お風呂屋さんからむ話は来場者からの発言もまじえてとても賑（にぎ）やかでした。

次は「物売り」です。会場の部屋に昭和初期の物売りを模（も）したお人形が展示され、そのお人形たちの細かい説明を記したパネルも掲示しました。「なあつとなあつとおー、なあつとおー」と、納豆（とう）売りの呼び声を流したので粋（いき）な雰囲気（ふんいき）でいっぱい。来場者から十一代将軍（しやうぐん）の頃の飴（アメ）売り、大八車（だいはちぐるま）で来てお餅（もち）をついてその場で売る小菊まんじゅう、毒消し（どくけし）売りの話などが出て話が弾（は）みました。呼び声にはアンコールもありました。結びは「婚礼」についてです。当語り部の会員である今年八十二歳の方が、物のない時代であった昭和十九年に芝の神明様で結婚式を挙げた話をしました。本物のしょうひちりきの演奏（えんそう）があったことや、岩手から上京した方の東京見物のお宿をするのでお餅を持

参して貰ったのを引き出物にしたことなどお話ししました。

引き続き昭和三十三年に結婚した語り部の会員が、そのとき撮影（さつえい）した8ミリ映画をビデオ化したものをテレビで上映しながら話をしました。お嫁さんの嫁入り支度（しだ）は自分の家で行い、そのあとご近所に挨拶（あいさつ）回りをするのが下町のしきたりでした。それを済ませてから披露宴（えんぎう）の会場へと向かったのです。子供達が珍（めづ）しがってついて回ったり、ご近所の方々にお祝いしていただいた様子などからは当時の新橋の人情味（にんじやうみ）が溢（あふ）れていた生活が偲（おも）われます。披露宴からの戻る道すがら車中から撮影した部分では、ちようどその頃東京タワーが建設しはじめたところで四本の足だけが立っているという珍しいシーンもあって、会場一杯懐かしさにひたりました。

飛び入りで桜田小学校の卒業生が終戦直後の新橋の闇市の様子をご自分の体験を交えて話してくださいましたが、それがきっかけとなって昔の新橋界限の話が会場内を飛びかいました。

予想以上の盛り上がり、会場の雰囲気作りにと前もって会員が作成した「桜田湯」の暖簾（のれ）が一段と映えておりました。（中嶋 房子 なかじまふさこ）

区内あちうちう

三田 綱坂・日向坂を歩く

物見（ものみ）高いは人の常などと言いますが、僕もその一人。史跡（ししき）・旧跡（きよしき）・新奇（しんき）な物・事件の現場に足を運んで「へー」と思えば、それで満足な野次馬（やじうま）なのです。

渡辺綱（わたなべのつな）の誕生（たんじ）の地という言い伝えの綱坂を上って行くのも気になるある場所を見たいがためです。一冊の本『旅する巨人』佐野真一（さのまこと）著を読んで、数年前東北地方で一泊したホテルの庭にある大きな家屋が港区内から移築（いせき）されたと説明されていたの思い出しました。その建物（たてもの）が『大民俗（おほみんぞく）』学者・同時に日銀（にちぎん）総裁・大蔵大臣を務めた経済人（けいぎじん）でありなが

ら、いま彼を知る人は少ない。『渋沢財閥（しぶさくざいばつ）』の三代目、敬三（けいぞう）氏が生活されていたお屋敷であったのです。著者が熱い共感こめて紹介される『誇（ほ）れる日本人』の物語に僕は心揺さぶられました。その舞台となったあたりにいつてみたいと思いました。

綱坂を上りきるとT字路で、左折した先に現在のは面白くも可笑（おかし）しくもないビルがたっているところがかつてアチック・ミューゼウムと名付けられた研究所があり、学者や客人達が賑（にぎ）やかに出入りした渋沢邸跡（あと）でした。



日向坂（平成17年11月撮影）

僕はあの大きな家を重ねながら、「へー」「フムフム」と横目で眺め通り過ぎてまいりました。

やや急な日向坂を下ると二の橋。この古川沿いは福沢諭吉先生晩年の散歩道だったと聞いたことがあります。有為（ゆゑ）の青年を育て続ける学舎（がくしゃ）を創った彼の偉業（いぎ）を偲（おも）びながら帰路へ。ふと見ると行列のあるらーめん屋さん発見。小腹も空いているので若人（わかじん）ばかりの後に敢然（かんぜん）と並びました。結果は、学生達の旺盛（わうせい）な食欲を満たす美味と仰天（ぎやうてん）なボリューム、奮闘（ふんとう）すれど、完食（かんじき）ならずでありました。報告（ほうこく）終わり。（武恒雄 たけつねお）

綱の手引坂	綱坂
	三井倶楽部
日 向 坂	オーストラリア大使館
	財務省三田会議所（旧渋澤邸跡地）
	民間マンション（上は高速道路）
	古川
（坂下→坂上）	二之橋

生活の道具

羽釜（お釜）

はじめ チョロチョロ

中パッパ



布子泣いてしまった取るな

羽釜（はが）はかまどでご飯を炊くた

めの道具です。又お湯を沸かしたりもします。材質は鉄やアルミニウムで、鍋（なべ）よりも深く作り、かまどにかける鏝（ば）の部分の部分が羽のような形をしているので羽釜と呼ぶのが正しいのですが、普通はお釜で通っていました。鏝から上は蒸（む）らすとき蒸気がこもる空間（かん）です。鏝から下はかまどの中にすっぽりと包まれて保温力（ほおん）が抜群（ばつぐん）です。又お釜の蓋（ふた）はご飯が煮えるときに吹き上がる蒸気を押さえるために重くて分厚い木の蓋が使われました。お釜で炊くご飯はおいしく、かまどで薪（き）を燃やす火かげんをしつかり見ながらご飯を炊きました。「始めチョロチョロ中パッパ、グツグツいったら火をひいて、赤子（あか）泣いてもふた取るな」こういう言い伝えて上手な炊き方を教えて貰ったのです。

① 始めチョロチョロ・・・とは、かまどにお釜をかけ全体に火がまわるようにゆつくりと火をくべます。
② 中パッパ・・・とは、お釜が熱くなった後は一気に火を強くします。木の蓋のところからねばりのある汁が出てきます。

③ グツグツいったら火をひいて・・・は、汁がふきこぼれないよう弱火にし、最後にひと燃やししてピチピチ音が聞こえたら火を落とします。

④ 赤子泣いてもふた取るな・・・とは、そのまま蒸らし続けること。蓋を取るとお釜の温度が下がり水っぽくなるので、たとえお腹をすかせた赤子が泣いてもあわてて蓋を取ったりしない。（赤子＝赤ん坊）

あわてずしつかりおいしいご飯を炊くための順序（じゆん）だてた言い回し、良くできてますね。

（宇和島 常子 うわじまつねこ）

電車唱歌（その2）

前号は、「電車唱歌」の歌詞の中で港区内の芝地区に関する部分を取り上げました。今回は赤坂青山地区に関する部分を記します。

なつかしの歌

青山行きは乗りかへて（*1）
赤坂見附 一本（つぎ）を
すぎて東宮御所（とうきゅうごしょ）の前
電車はゆくなり四丁目へ（*2）
青山墓地（ぼ）へは三丁目
渋谷氷川の病院を（*3）
訪（と）はんとならば 四丁目に
おりてゆくべし左へと
右にまがりて何もなく
内幸町とほりつつ
なほゆく先は虎の門
議事堂（ぎじどう）近く建てるなり
赤坂区へと入りぬれば
溜池（ためいけ） 田町 たちまちに
弁慶（べんけい）橋もうちすぎて
四ッ谷見附に至るなり



注（*1）このすぐ前で三宅坂を取り上げていますので、この乗かえ場所は三宅坂です。（*2）四丁目とは青山四丁目のこと。今の青山通りと外苑西通りとの交差点（こうさてん）付近。この先青山七丁目まで線路が延びたのは明治39年末、渋谷駅近くまで行くようになったのはそれから五年後の明治44年のことでした。（*3）渋谷氷川の病院とは方角からみて日本赤十字病院ではないかと思うのですが、この病院があるのは氷川ではなく広尾。この点に関して正しいことをご存知の方がおられましたらお教えてください。

芝、赤坂、青山と続いてきましたので、次号は麻布ということになります。でも、この歌が作られた

明治38年には麻布地区にはまだどこにも線路は敷かれておらず電車は走っていませんでしたから、この歌の中には出てきません。麻布地区最初の路線は青山一丁目と天現寺橋の間で、開通したのは明治39年、そして天現寺橋から赤羽橋まで延びたのが明治41年から42年にかけてでした。

（井上 繁 いのうえじゅん）

新橋の昔を語る（座談会）

ここ生涯学習センター「ばるーん」はかつては港区立桜田小学校の校舎でした。「語り部」の会員にはこの桜田小学校の卒業生が何名もおります。今回その方たちに子供のころの新橋はどんなであったかを語り合って貰いました。

司会 一番懐（な）かしい思い出という何ですか？

A やはりお祭りかな。ここの氏神様は烏森（からすもり）神社で、お祭礼は5月の4、5の両日。大きなお神輿（みこし）が出た。でも子供の頃の懐かしい思い出と言えやはり縁日（えんじち）かな。

B そう。お祭りは年に一回の行事だけど、縁日は毎月5の日だから回数が多い。縁日ってお店が出るのは夕方近くになってからだから、早く夕方にならないかなって。

司会 縁日のお店はどのあたりへ出たんですか。

D 烏森通り。この学校の門の前もお店が並んだ。小さいときは親に連れてって貰ったけど、小学校へ上るころになると、親からお小遣いを貰ってきようだけだとか、お友達同士で行ったりした。

E 縁日では、よく薄荷（は）パイプを買った。それとほおずきなんかも。

C ほおずきってあの丸いダイダイ色している実の部分をよく揉（も）んで種を取り出す。でももう少しっというところで失敗して口のところ破（やぶ）れてダメになってしまふ。姉から貰っては何度もやっただけでなかなかうまくできなかった。

E あ、そのほおずきでなくて、縁日のは海ほおずき。細長くてバナナのような形をしたのがなぎなたほうずき、平べったいのは何と言ったかしら。

E どっちも鳴らすのは結構（けい）難しいのよね。薄い黄色とか薄い赤とかに染めて。大きなお皿にのせて売られてた。確か青っぽい色のもあった。

A 我々、男のほうは小さいときはやはり薄荷パイプなんかを買ったけど、小学生の頃になると買ったのは吹き矢とか、針金細工（はりがひ）の鉄砲（てっぽう）なんかだな。

B 針金細工の鉄砲には2連発（れんぱつ）とか3連発なんてのもあったね。

C 私は縁日では月遅れの少年向けの雑誌（ざし）をよく買った。今の子供たちとは違って出たばかりの新本なんてなかなか買って貰えなかったもの。

D 雑誌の付録（ふろく）だけ売っていた店が出ていた。私は着せ替え人形とかお部屋の組み立てセットなんかを買った覚えがあるわ。雑誌の付録だから紙製（しせい）だけ。

（この続きは次号で。烏森神社で名を付けて貰った話や、新橋駅前の広場の話などを掲載予定です。）

生涯学習センターから

この新聞は月に2回開催している学習会で作成しました。港区の子どもたちにも地域の昔のこと、おじいさん、おばあさんがどんな生活をしてきたのを知ってもらいたい、という気持ちから、この新聞の文章は小学校の高学年でも読めるように気をつけて書いてもらっています。学習会は、毎月第2・第4水曜日に開催していますので、「語り部」としての活動に関心のある方、ぜひご参加ください。

学校の先生方へ！（地域の方へ）

生涯学習センターでは、学校の授業や地域イベントへ語り部の派遣・調整をしています。授業・イベント内容によって相談に乗りますのでご連絡ください！

問合せ 3431・1606
発行 港区立生涯学習センター
平成18年3月1日